「探究し続ける縣陵人」のための情報誌

TANKYU NEWS

10 Oct.

MATSUMOTO AGATAGAOKA Senior High School

発行　探究学習推進室
〒390-8543 松本市県２－１－１
松本県ケ丘高校　TEL 0263-321142

3年D組小松海斗さんの質問に答える小平さん

真摯に探究し続ける

100 周年記念「探究」講演会として、10 月 5 日（木）、小平奈緒さんにご講演いただきました。アスリートとしてどのように世界に挑んできたのか、小平さんの半生の紹介とともに、高校生の生活や将来の目標への考え方をアドバイスいただきました。

100 周年記念「探究」講演会
講師 小平 奈緒 さん

「記録」のその先へ

思い通りにならないときのマインド持ち方や、勇気をもってオランダへ留学へ飛び込むという挑戦から、人との比較や競争で勝つという価値観とは違う価値観を学んだというお話、記録や結果だけが自分のすべてではなく、金メダルのその先の人生をどう歩むか、いままさに探究の途上であるというお話などをしていただきました。

ゆっくり丁寧で優しく、しかも説得力のある言葉に、全校生徒が引き込まれました。講演後の生徒による質問は時間いっぱいまでやまず、部活動での悩みや受験生としての悩みなど一つ一つに対し、生徒の心に寄り添って答えてくださいました。

とことん「自分」と向き合う

世界のトップアスリートとして活躍してきた小平奈緒さんのお話から感じたことは、とことん「自分」に向き合い、真摯に探究し続けている姿勢でした。オリンピックでの金メダルという、最高の「結果」を出している小平さんでさえ、思い通りにならないことが多々あり、それに対して逃げずに向き合い、試行錯誤しながらさらに金メダルのその先へ進もうとしている小平さんの姿勢に、私たちは大きな勇気をもらった気がします。

１年生 首都圏研修へ

4年ぶり

10/31～11/2　２泊３日

１年生最大の校外研修である「首都圏研修」がいよいよ 10 月 31 日に出発します。1 日目は TGG（TOKYO GLOBAL GATEWAY）での英語体験学習、2 日目はクラスを越えた班編成による班別企業研修、3 日目は希望コース別の大学・研究機関研修です。

2018 年度に普通科 1 泊 2 日、探究科 2 泊 3 日で始まったこの研修は、翌 19 年には普通科・探究科問わず 2 泊 3 日となって大型化し、さらに学科横断のグループ・コースによる研修という「ごちゃまぜ」をコンセプトにしています。

しかし、コロナ禍によりここ数年県内研修で代替するなどしてきました。今年度の２年生は夏休み中に希望研修というかたちで首都圏研修を実施、有意義な時間を過ごしました。そして、今回、１年生は４年ぶりの本格復活実施となります。

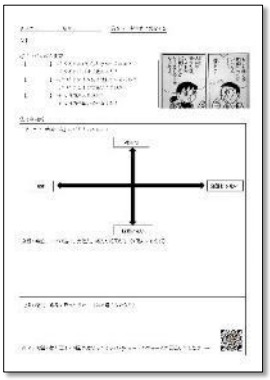
特に２日目の朝から晩までのごちゃまぜ班別行動は、企業等へのアポ取りを生徒自身で行う特徴的なもの。１日の行動計画も自分たちで立てるなど、すでに多くの困難を乗り越えてきているだけに、当日の経験は忘れられない格別なものになるでしょう。

３日目の大学・研究機関訪問も、ただの「大学見学」にならないよう工夫しながら計画しました。学問の最前線、「ホンモノ」に触れる貴重な機会となるべく、縣陵ならではのプログラムになっています。大いに楽しみながら学んできてください。

生徒実行委員会が作成してくれた「しおり」の表紙。「好きを　つきつめよう」。その表情からは、「ドキドキ」と「ワクワク」が同居する首都圏研修への思いが伝わってきませんか？

３年生
哲学対話で考え、表現する。

３年生の「総合的な探究の時間」では、信州大学の松島恒熙先生のご助言のもと、「哲学対話」に取り組んでいます。目の前には「受験」という壁が立ちはだかっており、ややもすれば視野を狭くしてしまいがちなもの。その先の人生も考えながら、且つ受験にも役立てられるように、物事を深く考え、考えたことを言語化する練習の場としています。そして、毎年だんだんピリピリしてくる受験生の雰囲気があるのですが、周囲の友人たちと「おしゃべり」する機会としても活用してください。



いつものワークシート

第１回で来校して下さった松島先生

これまでのテーマ
第１回　スポーツとは？
第２回　「存在する」とは
第３回　勉強って何？
第４回　AI(愛)とは？
第５回（最終回）未定

１年探究科
信州学中間発表会を実施（9/28）

発表への質疑の様子。先輩からの厳しい質問にも明確に答えた

探究科 1 年生は信州学の中間発表会を 9 月 28 日に行いました。この中間発表では、探究科の 2 年生 3 年生が聞きにくることが恒例となっており、先輩から後輩へ様々なアドバイスとともに、開科以来の探究科の精神が伝授されました。

発表は以前よりも「身振り手振り」をうまく使い、堂々とした立派なものでした。原稿を読む生徒もほとんどなく、自分の言葉で伝えようとする意気込みが良く伝わって来ました。最後の先輩方による講評では、3 年生の関谷さんからオール英語で講評いただくサプライズもありました。